

# 「つづける/あげる/つける」を補助動詞とする イ形補助動詞文の統語構造\*

朴墉一\*\*  
pyongil17055@hanmail.net

## <目次>

- |                      |             |
|----------------------|-------------|
| 1. はじめに              | 4. 統語構造の分析  |
| 2. イ形補助動詞の認定基準       | 4.1 「つづける」文 |
| 3. 論証に用いる現象          | 4.2 「あげる」文  |
| 3.1 「尊敬形-主語」の一致現象    | 4.3 「つける」文  |
| 3.2 「だけ」と「ない」のスコープ現象 | 5. おわりに     |

主題語: イ形補助動詞([i]-Type Auxiliary), 統語構造(Syntactic Structure), 認定基準(Acceptance Criterion), 一致現象(Agreement Phenomenon), スコープ現象(Scope Phenomenon)

## 1. はじめに

本稿は日本語の補助動詞文のうちイ形と呼ばれている補助動詞文の統語構造を示すものである。これはイ形補助動詞文の統語構造を総合的に捉えるために行っている作業の一部分である。本稿では特に「つづける/あげる/つける」を補助動詞とするイ形補助動詞文の統語構造を示していく。

拙稿(2012)で示したように、日本語の研究においてイ形<sup>2)</sup>補助動詞文の統語構造についての研究は、イ形補助動詞が複合動詞と同じ「動詞連用形-動詞」の形態を持つという理由から、複合動詞の研究に含まれていると考えられる(cf. 姫野1999)。そのため、イ形補助動詞

\* This work was supported by the National Research Foundation of Korea Grant funded by the Korean Government (NRF-2011-358-A00080).

\*\* 韓国外国語大専校 日本研究所 学術研究教授

- 1) 他の主なイ形補助動詞文の統語構造については、拙稿(2012)において考察している。従って、本稿で取り上げる「つづける/あげる/つける」を補助動詞とするイ形補助動詞文の統語構造を考察することで、主なイ形補助動詞文の統語構造を経験的に、そして総合的に捉えることになる。
- 2) 本稿において、「イ形」という用語と概念は影山(1993:75)に沿っている。

文のみを取り挙げ、イ形補助動詞文の統語構造を考察した研究は見当たらない。それは日本語の補助動詞文の統語構造についての考察は今まで複文構造であるという分析がなされ、それを前提に行われているので(cf.柴谷1978、長谷川1999)、敢えて補助動詞文からイ形補助動詞文を取り立てる必要性がなかったためなのかも知れない。

しかし、イ形補助動詞文についてのこのような研究の流れにも拘らず、「動詞連用形-動詞」を述語とする文において、後項動詞が補助動詞である場合と複合動詞の後項動詞である場合を区別する必要があることを主張しているのが寺村(1984)である。寺村(1984)はイ形補助動詞と複合動詞の後項動詞を区別しなければならない必要性をアスペクトの体系化と関連づけて次のように指摘している。

“複合動詞のうちある特定の特徴をもつものを、「(本)動詞+(三次的)アスペクトの形式」としてすくいとり、それをアスペクトの体系の中に位置づけるためには、… 多くの作業が必要である。さしあたり必要なことをあげると次のようである。… V2が、V1の表す事象のアスペクトを表す補助形式として機能している型のものを選び出すこと。… 同じ形態でも意味、用法の違うものについてはそれぞれの意味、用法のV2について調べなければならない。” (pp.164-165)

また、イ形補助動詞文の統語構造についての考察が必要な理由は、上記のように、補助動詞文の統語構造が複文構造であるという従来の研究で見逃しているところが観察されるためである。例えば、「あげる」を補助動詞とする文(1a)には尊敬形と主語の一致現象において、(1b)のような現象が観察される。

- (1) a. 横須賀先生が手紙を書きつづけた。  
b. 横須賀先生が手紙をお書きつづけになった。

(1a)に対する(1b)のような尊敬形と主語の一致現象は、(1a)が複文構造であるとする場合には説明することができず、(1a)が単文構造であるとする場合にのみ説明できる<sup>3)</sup>。

以下、イ形補助動詞と複合動詞の後項動詞を区別するためのイ形補助動詞の認定基準を提示し(2章)、その基準に沿ってイ形補助動詞である「つづける」、「あげる」、「つける」を取り出し、それらの文の統語構造を示していく(4章)。また、「つづける」、「あげる」、「つける」を補助動詞とするイ形補助動詞文の統語構造を明らかにするために用いる「尊敬形-主語」

3) (1b)がみせる尊敬形と主語の一致現象が何故複文構造ではなく、単文構造を示す証拠になるかは3章で示す。

の一致現象と、「だけ」と「ない」のスコープ現象が何を示しているのかについても考察の前に予め示す(3章)ことにする。

## 2. イ形補助動詞の認定基準

1章で言及したように、日本語における複合動詞の後項動詞とイ形補助動詞は前項動詞と接続する形態が「動詞連用形動詞」であるという点で同じである。従って、形態だけを持って複合動詞の後項動詞とイ形補助動詞を区別することはできない。本章では、述語として現れる複合動詞の後項動詞とイ形補助動詞を区別するための、イ形補助動詞の認定基準を示す。

- (2) a. 福井部長が示談を打ち切った。
- b. 安井君がのり巻きを食べつづけた。

(2a)と(2b)に現れる述語は共に「動詞連用形動詞」の形態をしているが、意味的な側面から見ると(2a)の後項動詞は前項動詞と単一語化して「中止する」という意味を表す複合動詞の後項動詞である。一方、(2b)の後項動詞は「安井君がのり巻きを食べる」という事件に「つづけた」という意味を添加するのでイ形補助動詞であると考えられる。(2a)と(2b)において、「動詞連用形動詞」という形態だけでは「打切る」の「切る」と、「食べつづける」の「つづける」が異なる機能を持っているという事実を区別することは難しい。さらに、次の(3)のように後項動詞が同じ動詞である場合は、複合動詞の後項動詞とイ形補助動詞を区別することがより難しくなる。

- (3) a. 福井君が研究をやりつづけた。
- b. 弟がパンを食べつづけた。

(2a)の「切る」と(2b)の「つづける」を区別した意味的な基準からすると、(3a)の「つづけた」と(3b)の「つづけた」は同じ意味解釈を示しているので、(3a)と(3b)の「つづけた」をそれぞれ複合動詞の後項動詞とイ形補助動詞として区別することはできない。つまり、(3a)は「福井君が研究をやる」という事件を「つづけた」のような意味解釈であり、(3b)は「弟がパンを食

べる」という事件を「つづけた」のような意味解釈である。この場合、(3a)と(3b)の「つづけた」は同じ意味機能を示しているので、意味的な基準のみで両者を区別することは難しい。

従って、複合動詞の後項動詞とイ形補助動詞を区別するためには、上記した意味解釈の基準の他に、統語的な側面からの基準を付け加える必要がある。統語的な側面から(3a)と(3b)の「つづける」を観察してみると、それぞれ(4c)と(5c)のような違いが浮かび上がる。

(4) a. 福井君が研究をやりつづけた。(=(3a))

- b. 福井君が研究をする。
- c. 福井君が研究をつづけた。

(5) a. 弟がパンを食べつづけた。(=(3b))

- b. 弟がパンを食べる。
- c.\*弟がパンをつづけた。

(4c)の適格性は(4a)における「つづける」を独立に機能させることができることを示している。一方、(5c)の不適格性は(5a)における「つづける」を独立させることができないことを示している。(4a)と(5a)における「つづける」のこのような統語現象の違いから、(4a)の「つづける」は複合動詞の後項動詞であると考えられるのに対し、(5a)の「つづける」はイ形補助動詞であると考えられることができる。

ここまで述べてきた通り、複合動詞の後項動詞とイ形補助動詞は「動詞連用形動詞」という同じ形をもって使われるために、形態的なレベルでは両者を区別することができない。また、文レベルにおける意味的な基準からも、例(4)と(5)で示したように、後項動詞が同じ動詞の場合は複合動詞の後項動詞とイ形補助動詞を区別することができない。従って、複合動詞の後項動詞とイ形補助動詞を区別するためには意味的な側面だけではなく、統語的な側面からも考察する必要がある。

以上の内容をまとめると、複合動詞の後項動詞からイ形補助動詞を区別できる認定基準を次のように示すことができる。

(6) イ形補助動詞の認定基準

- a. 本動詞の意味から派生した意味を持ち、  
その意味は前項動詞がなす事件に対してなんらかの意味を付け加える。
- b. 文中で後項動詞を前項動詞から独立させた場合、

適格な述語として機能することができない。

(6a)と(6b)はイ形補助動詞として認められるための基準になる項目である。(6a)は意味的な側面からイ形補助動詞を捉える場合の項目で、(6b)は統語的な側面からイ形補助動詞を捉える場合の項目である。そして、イ形補助動詞を確実に捉えるためには、(6a)と(6b)を両方満足させなければならない。

以下では、(6)に設けたイ形補助動詞の認定基準を基に取り出したイ形補助動詞のうち、「つづける」、「あげる」、「つける」を取り上げ、これらの文の統語構造を明らかにする<sup>4)</sup>。

### 3. 論証に用いる現象

本章では、「つづける」、「あげる」、「つける」を補助動詞とするイ形補助動詞文の統語構造を明らかにするために用いる2つの文法現象である「尊敬形-主語」の一致現象と、「だけ」と「ない」のスコープ現象が何を意味しているのかについて述べる。

#### 3.1 「尊敬形-主語」の一致現象

日本語の尊敬形は動詞に付いて、それと意味的に照合する主語と一致関係を見せる。例えば、(7a)は「お読みになる」という尊敬語が「社長」という尊敬の対象になる主語と一致関係をなすことから適格な文になるが、(7b)は「お読みになる」という尊敬語と一致関係をなす主語が尊敬の対象にならない「社員」であるために不適格な文になる。

- (7) a. 社長が報告書をお読みになった。  
b. \*社員が報告書をお読みになった。

このように「尊敬形-主語」の一致現象には尊敬語と主語の意味的な照合という制約の他に、尊敬語と主語の一致は単一節の中で行われなければならないという制約がある。例え

---

4) これらのイ形補助動詞は本稿の基準とは異なるものではあるが、寺村(1984)で提示された補助動詞である。寺村(1984)が提示した補助動詞の認定基準は、本動詞から派生され、他の意味を持つ動詞という意味的なものである。

ば、(8a)に現れる「尊敬形-主語」の一致現象は(8b)は許すが、(8c)は許さない。

- (8) a. 社長は社員たちが報告書を読むことを進めた。
- b. 社長は社員たちが報告書を読むことをお進めになった。
- c. \*社長は社員たちが報告書をお読みになることを進めた。

(8a)は「こと」節を埋め込んでいる複文であり、(9)のような統語構造で示すことができる<sup>5)</sup>。

- (9) [s 社長は [s 社員たちが報告書を読む]ことを進めた]] (=8a)

そして、このような(8a)の統語構造に(8b)と(8c)が示す「尊敬形-主語」の一致現象を示すとそれぞれ(10a)と(10b)のように表すことができる。

- (10) a. [s 社長は [s 社員たちが報告書を読む]ことをお進めになった]
- b. \*[s 社長は [s 社員たちが報告書をお読みになる]ことを進めた]

(10a)と(10b)の違いは、(10a)の場合、尊敬語「お進めになった」とそれと照合している主語「社長」が同じ節の中で一致関係をなしているが、(10b)の場合は尊敬語「お読みになる」とそれと照合している主語「社長」が同じ節の中で一致関係をなしていないということである。このような違いによって(8b)は適格な文として認められ、(8c)は不適格な文になる。

(8a)と(8b)が示しているこのような違いは、「尊敬形-主語」の一致現象が尊敬語とそれと照合している主語が必ず同じ節のなかで一致関係をなさなければならないという事実を示している。従って、ある文に「尊敬形-主語」の一致現象が現れた場合、尊敬語とそれと照合している主語の範囲までが1つの節を成すと考えることができる。

### 3.2 「だけ」と「ない」のスコープ現象

ある文の意味解釈において、否定詞と数量詞が及ぼす相対的なスコープ関係によってその文の意味解釈が2通り以上に現れるという指摘は多々なされている(cf. Nishigauchi 1990、

5) このような統語構造は1つの単文を1つの述語とそれと係わる1つの主語がある文であるという前提から成り立つものである。

Kato 1985、三原 1997、など)。

例えば、(11a)は「全て」という数量詞と「ない」という否定詞が存在しているために、(11a)には(11b)と(11c)のような2つの意味解釈が現れる。

- (11) a. 課長は残業を全ての社員に与えなかった。
- b. 課長が残業を与えなかったのは、社員全員である。
- c. 課長が残業与えたのは、一部の社員であり、全員ではない。

(11a)に(11b)のような意味解釈が現れるのは、(11a)において「ない」が及ぼしているスコopが「全て」が及ぼしているスコopより狭いためである。一方、(11a)に(11c)のような意味解釈が現れるのは、「ない」が及ぼすスコopが「全て」が及ぼすスコopより広いためである。

このように、ある文に否定詞と数量詞が現れる場合、否定詞と数量詞が及ぼすスコopの範囲が相対的な場合、その文の意味解釈は曖昧になる。このような事実を基に、Kato(1985)は日本語の取り立て詞である「だけ」が否定文に現れる場合においても、両者の相対的なスコop関係によってその文の意味解釈が曖昧になると指摘している。例えば、(13a)からは(13b)と(13c)の2通りの意味解釈が現れる。

- (13) a. 内村さんはキムチだけを残さなかった。
- b. 内村さんが残さなかったのは、唯一キムチだけ。
- c. 内村さんはキムチは勿論、他のおかずも残した。

(13a)に(13b)の意味解釈が現れるのは「だけ」が「ない」より広いスコopを取るためであり、(13a)に(13c)の意味解釈が現れるのは「ない」が「だけ」より広いスコopを取るためである。ただ、三原(1997:154)の指摘通り「だけ」と否定詞の相対的なスコop関係において、否定文に「だけ」が現れるからといって必ずその文の意味解釈が曖昧になるわけではない。

- (14) a. 一期生だけが来なかった。
- b. 来なかったのは、唯一一期生だけ。
- c.\*一期生は勿論、他の期生も来なかった。

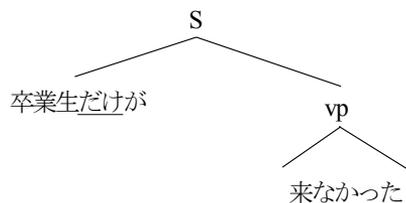
例文(14a)は否定文に「だけ」が現れているにも拘らず「だけ」が「ない」より広いスコopを

取る場合の意味解釈である(14b)のみが現れ、「ない」が「だけ」より広いスコープを取る場合の意味解釈である(14c)は現れない。

以上で示したように、「だけ」と「ない」の相対的なスコープ関係には、「だけ」が「ない」より広いスコープを取る場合の意味解釈と、「ない」が「だけ」より広いスコープを取る場合の意味解釈が現れる場合があると考えられる。

ここで注目しなければならないことは、「だけ」と「ない」の相対的なスコープ関係を統語構造の位置関係として示すことができるという点である。例えば、(14a)には「だけ」が「ない」より広いスコープを取る意味解釈しか現れないことから、(15)のような統語構造で表すことができる。

(15)



三原(1997:154)

(15)の統語構造からわかることは、構造的に見て「だけ」が「ない」より高い位置を占めているという点である。これは、相対的なスコープ関係を持っている2つの要素が存在する場合、広いスコープを取る要素はそれより狭いスコープを取る要素より、構造的に高い位置を占めるということを示している。このように相対的なスコープ関係と構造的な位置関係を通して文の統語構造を示すことができる。

以下の4章では3章で示した「尊敬形-主語」の一致現象と「だけ」と「ない」のスコープ現象をイ形補助動詞文に適用し、イ形補助動詞文の統語構造を示していく。

## 4. 統語構造の分析

本章では、2章で提示したイ形補助動詞の認定基準を基に取り出したイ形補助動詞のうち「つづける」、「あげる」、「つける」を補助動詞とするイ形補助動詞文に、3章で示した「尊敬形-主語」の一致現象と、「だけ」と「ない」のスコープ現象がどのように現れるのかを観察し、それらの文の統語構造を明示する。

## 4.1 「つづける」文

「つづける」が補助動詞として機能しているイ形補助動詞文に、「尊敬形-主語」の一致現象と、「だけ」と「ない」のスコープ現象がどのように現れるのかを観察することで、「つづける」を補助動詞とするイ形補助動詞文の統語構造を示すことができる。

まず、「尊敬形-主語」の一致現象が「つづける」文にどのように現れるのかを見てみる。

- (16) a. 木村先生が太鼓を叩きつづけた。  
b. 木村先生が太鼓をお叩きになりつづけた。  
c. 木村先生が太鼓をお叩きつづけになった。
- (17) a. 部長が企画を話しつづけた。  
b. 部長が企画をお話しになりつづけた。  
c. 部長が企画をお話しつづけになった。
- (18) a. お嬢様がお茶を飲みつづけた。  
b. お嬢様がお茶をお飲みになりつづけた。  
c. お嬢様がお茶をお飲みつづけになった。

3.1章で示した「尊敬形-主語」の一致現象から、尊敬語とそれと一致する主語の範囲までが1つの節であると考えられるので、(16a)-(18a)に現れる(16b)-(18b)と(16c)-(18c)の「尊敬形-主語」の一致現象は(16a)-(18a)がそれぞれ(19a)-(19c)と(20a)-(20c)のような統語構造であると考えられることができる。

- (19) a. [s [s 木村先生が太鼓をお叩きになり] つづけた]  
b. [s [s 部長が企画をお話しになり] つづけた]  
c. [s [s お嬢様がお茶をお飲みになり] つづけた]
- (20) a. [s 木村先生が太鼓をお叩きつづけになった]  
b. [s 部長が企画をお話しつづけになった]  
c. [s お嬢様がお茶をお飲みつづけになった]

(19)は(16a)-(18a)の前項動詞に尊敬形である「お」と「になる」が付いて尊敬語(「お叩きにな

る、お話しになる、お飲みになる」)を作り、その尊敬語と意味的に照合している主語(「木村先生、部長、お嬢様」)までが1つの節を成す複文構造であることを示している。一方、(20)は(16a)-(18a)の前項動詞とイ形補助動詞全体に尊敬形「お」と「になる」が付いて尊敬語を作り、その尊敬語と一致している主語が1つの節を成す単文構造であることを示している。

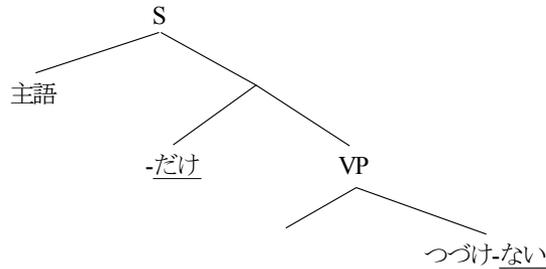
このように「つつける」を補助動詞とするイ形補助動詞文が複文構造と単文構造を両方持っているという事実は、3.2節で言及した「だけ」と「ない」のスコープ現象からも確認できる。

- (21) a. 木村先生が太鼓だけを叩きつづけなかった。  
 b. 木村先生が叩きつづけなかったのは、唯一太鼓だけ。  
 c. 木村先生は太鼓は勿論、他の楽器も叩いた。
- (22) a. 部長が企画だけを話しつづけなかった。  
 b. 部長が話しつづけなかったのは、唯一企画だけ。  
 c. 部長は企画は勿論、他の起案も話した。
- (23) a. お嬢様がお茶だけを飲みつづけなかった。  
 b. お嬢様が飲みつづけなかったのは、唯一お茶だけ。  
 c. お嬢様はお茶は勿論、他の物も飲んだ。

(21a)-(23a)は「だけ」と「ない」が現れている文で、3.2節で示したように「だけ」と「ない」の相対的なスコープ関係によって、それぞれ(21b)-(23b)と(21c)-(23c)の2つの意味解釈が現れる。

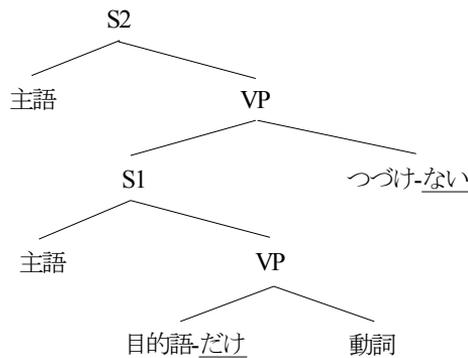
(21a)-(23a)に現れる(21b)-(23b)の意味解釈は、「だけ」が「ない」より広いスコープを取る場合の意味解釈であり、(21a)-(23a)に現れる(21c)-(23c)の意味解釈は「ない」が「だけ」より広いスコープを取る場合の意味解釈である。3.2節の指摘通り、広いスコープを取る要素はそれより狭いスコープを取る要素より構造的に高い位置を占めるので、「だけ」が「ない」より広いスコープを取る場合の意味解釈である(21b)-(23b)は(24)のような統語構造、つまり単文構造であると考えられる。

(24)



一方、「ない」が「だけ」より広いスコープを取る場合の意味解釈である(21c)-(23c)は(25)のような統語構造、つまり「ない」が「だけ」より高い位置を占める複文構造であると考えられる。

(25)



以上のようなことから、「つづける」を補助動詞とするイ形補助動詞文は、文を形成する初期段階では複文構造を成すが、一定の派生過程を経るうちに単文構造としての機能も持つようになったものと考えられる。

## 4.2 「あげる」文

本節では「尊敬形-主語」の一致現象と、「だけ」と「ない」のスコープ現象を通して、「あげる」を補助動詞とするイ形補助動詞文の統語構造を示す。

6) 補助動詞文が初期構造において複文構造であることについての詳細は井上(1976)、影山(1993)、柴谷(1978)を参照されたい。

まず、「尊敬形-主語」の一致現象から見ていく。

- (26) a. 松村先生がロケットを打ちあげた。  
 b. \*松村先生がロケットをお打ちになりあげた。  
 c. 松村先生がロケットをお打ちあげになった。
- (27) a. 市長が机を持ちあげた。  
 b. \*市長が机をお持ちになりあげた。  
 c. 市長が机をお持ちあげになった。
- (28) a. お客様が春の歌詞を作りあげた。  
 b. \*お客様が春の歌詞をお作りになりあげた。  
 c. お客様が春の歌詞をお作りあげになった。

(26b)-(28b)の「尊敬形-主語」の一致現象が示しているように、(26a)-(28a)における前項動詞が尊敬語になると(26b)-(28b)は不適格な文になる。それに対して、前項動詞とイ形補助動詞が全体として尊敬語になる(26c)-(28c)は適格な文になる。3.1節で指摘した通り、尊敬語とそれと一致する主語は同じ節の中に現れなければならないことから、(26b)-(28b)の不適格性は「あげる」を補助動詞とするイ形補助動詞文が複文構造ではないことを示し、(26c)-(28c)の適格性は「あげる」文が単文構造であることを示していると考えられる。

このような事実は「あげる」文に現れる「だけ」と「ない」のスコープ現象からも確認できる。

- (29) a. 杉本先生はロケットだけを打ちあげなかった。  
 b. 杉本先生が打ちあげなかったのは、唯一ロケットだけ。  
 c. \*杉本先生はロケットは勿論、他の物も打ちあげた。
- (30) a. 課長は食卓だけを持ちあげなかった。  
 b. 課長が持ちあげなかったのは、唯一食卓だけ。  
 c. \*課長は食卓は勿論、他の話も持ちあげた。
- (31) a. お嬢様はサバだけを釣りあげなかった。  
 b. お嬢様が釣りあげなかったのは、唯一サバだけ。

c.\*お嬢様はサバは勿論、他の魚も釣りあげた。

(29)-(31)の現象から分かることは、(29a)-(31a)からは「だけ」が取るスコープが「ない」が取るスコープより広い場合の(29b)-(31b)の意味解釈は現れるが、「ない」が取るスコープが「だけ」が取るスコープより広い場合の(29c)-(31c)の意味解釈は現れないということである。

4.1節で示した通り、「だけ」が「ない」より広いスコープを取る場合は「だけ」が「ない」より構造的に高い位置を占めるので、(29a)-(31a)において(29b)-(31b)のみの意味解釈が現れるという事実は、(29a)-(31a)が4.1節で示した(24)のような単文構造であることを示していると考えられる。

以上のように、「あげる」が補助動詞として機能するイ形補助動詞文は、「尊敬形-主語」の一致現象と、「だけ」と「ない」のスコープ現象から、単文構造であることがわかる。ただ、井上(1976)、影山(1993)、柴谷(1978)などの指摘通り、日本語の補助動詞文は初期構造において複文構造であると考えられるので、「あげる」文が見せている上記のような単文構造は初期構造から表層構造に派生される過程において現れた統語構造であると考えられる。

### 4.3 「つける」文

本節では「つける」を補助動詞とするイ形補助動詞文に現れる「尊敬形-主語」の一致現象と、「だけ」と「ない」のスコープ現象を通して、それらの統語構造を示していく。

まず、「尊敬形-主語」の一致現象から見ていく。

(32) a. 山田先生は(掲示板に)絵を張りつけた。

b.\*山田先生は絵をお張りになりつけた。

c. 山田先生は絵をお張りつけになった。

(33) a. 花子所長は(根本に)毛束を巻きつけた。

b.\*花子所長は毛束をお巻きになりつけた。

c. 花子所長は毛束をお巻きつけになった。

(34) a. 部長はスイカを踏みつけた。

b.\*部長はスイカをお踏みになりつけた。

c. 部長はスイカをお踏みつけになった。

(32a)-(34a)に現れる「尊敬形-主語」の一致現象において、前項動詞が尊敬語になっている(32b)-(34b)は不適格になり、前項動詞と「つける」全体が尊敬語になっている(32c)-(34c)は適格な文になっている。このような事実は、3.1節で指摘した尊敬形と主語の一致関係が示す節の概念を用いると、前項動詞と「つける」全体が尊敬語になっている(32c)-(34c)のみが適格な文であるので、「つける」を補助動詞とするイ形補助動詞文は単文構造を成していると考えることができる。

このような事実は「だけ」と「ない」のスコープ現象からも観察できる。

- (35) a. 子供たちは中華屋のチラシだけを張りつけなかった。  
 b. 子供たちが張りつけなかったのは、唯一中華屋のチラシだけ。  
 c.\*子供たちは中華屋のチラシは勿論、他の店のチラシも張り付けた。
- (36) a. 市長は(その件に関して)住民の同意だけを取りつけなかった。  
 b. 市長が取りつけなかったのは、唯一住民の同意だけ。  
 c.\*市長は住民の同意は勿論、他のことも取りつけなかった。
- (37) a. 魚屋さんはサンマの口だけを結びつけなかった。  
 b. 魚屋さんが結びつけなかったのは、唯一サンマの口だけ。  
 c.\*魚屋さんはサンマの口は勿論、他の魚の口も結び付けた。

(35)-(37)からわかるように、(35a)-(37a)に対する「だけ」と「ない」のスコープ関係は、「だけ」が「ない」より広いスコープを取る場合の(35b)-(37b)の意味解釈のみが現れ、「ない」が「だけ」より広いスコープを取る場合の(35c)-(37c)の意味解釈は現れない。従って、「つける」を補助動詞とするイ形補助動詞文は4.1節の(24)で示したような「だけ」が「ない」より広いスコープを取る場合の統語構造である単文構造のみを持つと考えられる。

以上のことから、「つける」を補助動詞とするイ形補助動詞文は単文構造を持つと考えられる。勿論、4.1節と4.2節で示したように、「つける」文も初期構造においては複文構造であるが、表層構造への派生過程の中で単文構造を持つようになったと考えられる。

## 5. おわりに

本稿では日本語のイ形補助動詞文のうち、特に「つづける」、「あげる」、「つける」を補助動詞とするイ形補助動詞文の統語構造を明示した。論証のために用いた文法現象は「尊敬形-主語」の一致現象と、「だけ」と「ない」のスコープ現象であり、これらの文法現象が「つづける」、「あげる」、「つける」を補助動詞とするイ形補助動詞文にどのように現れるのかを考察することで、「つづける」文、「あげる」文、「つける」文の統語構造を明示することができた。

本稿で示した考察結果は次の通りである。

- I. 「つづける」を補助動詞とするイ形補助動詞文は、従来の指摘通り、初期構造においては複文構造であると考えられるが、表層構造へ派生される過程で単文構造としての機能も果たすようになり、複文構造と単文構造の両方の構造を持っていると考えられる。
- II. 「あげる」と「つける」を補助動詞とするイ形補助動詞文は、単文構造のみの機能をみせる。ただ、これらのイ形補助動詞文は初期構造においては、従来の指摘通り、複文構造であると考えられる。

本稿は、日本語のイ形補助動詞文の統語構造を総体的に捉えるために必要な個々のイ形補助動詞文の統語構造を経験的に確認する一作業として行われた。このような作業はイ形補助動詞が全て同じ統語構造を持つという一括的な考え方を否定するものである。実際、上述した通り、本稿においても「つづける」を補助動詞とするイ形補助動詞文の統語構造と、「あげる」と「つける」を補助動詞とするイ形補助動詞文の統語構造の違いを明らかにしている。

残された課題として、まだ経験的に確認できていない幾つかのイ形補助動詞文の統語構造を明らかにする必要がある。

【参考文献】

- 井上和子(1976)『変形文法と日本語(上·下)』大修館, pp.3-268  
影山太郎(1993)『文法と語形成』くろしお, pp.1-389  
片岡喜代子(2006)『日本語否定文の構造：かき混ぜ文と否定呼応表現』くろしお, pp.1-279  
岸本秀樹(2005)『日英語対照研究シリーズ(8)統語構造と文法関係』くろしお, pp.9-316  
柴谷方良(1978)『日本語の分析』大修館, pp.3-370  
寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお, pp.11-358  
沼田善子(1986)「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社, pp.105-391  
姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房, pp.1-266  
三原健一(1997)「動詞のアスペクト構造」『日英語比較選書7 ヴォイスとアスペクト』研究社, pp.108-196  
박용일(2012)「일본어의 이형 보조동사구문의 통사구조」『日本語文学』日本語文学会, pp.85-104  
Kato, Y.(1985) *Negative Sentences in Japanese*, *Sophia Linguistica 19*, Monograph Sophia University, pp.1-127  
Nishigauchi, T.(1990) *Quantification in the Theory of Grammar*, Kluwer, pp.1-269

---

논문투고일 : 2013년 03월 10일  
심사개시일 : 2013년 03월 20일  
1차 수정일 : 2013년 04월 09일  
2차 수정일 : 2013년 04월 15일  
게재확정일 : 2013년 04월 20일

---

〈要旨〉

「つづける/あげる/つける」を補助動詞とするイ形補助動詞文の統語構造

本稿では、日本語のイ形補助動詞のうち「つづける」、「あげる」、「つける」を補助動詞とするイ形補助動詞文の統語構造を明示した。それらの統語構造を示すために用いた道具立ては、「尊敬形主語」の一致現象と、「だけ」と「ない」のスコープ現象である。「尊敬形主語」の一致現象と、「だけ」と「ない」のスコープ現象を「つづける」、「あげる」、「つける」を補助動詞とするイ形補助動詞文に適用して得られた考察結果は次の通りである。

- I. 「つづける」を補助動詞とするイ形補助動詞構文は、従来の指摘通り、初期構造においては複文構造であると考えられるが、表層構造へ派生される過程で単文構造としての機能も果たすようになり、複文構造と単文構造の両方の構造を持っていると考えられる。
- II. 「あげる」と「つける」を補助動詞とするイ形補助動詞構文は、単文構造のみの機能をみせる。ただ、これらのイ形補助動詞文は初期構造においては、従来の指摘通り、複文構造であると考えられる。

本稿は、日本語のイ形補助動詞構文の統語構造を総合的に捉えるために必要な個々のイ形補助動詞文の統語構造を経験的に確認する一作業として行われた。このような作業はイ形補助動詞が全て同じ統語構造を持つという一括的な考え方を否定するものである。実際、上述した通り、本稿においても「つづける」を補助動詞とするイ形補助動詞文の統語構造と、「あげる」と「つける」を補助動詞とするイ形補助動詞文の統語構造の違いを明らかにしている。

残された課題として、まだ経験的に確認できていない幾つかのイ形補助動詞文の統語構造を明らかにする必要がある。

**A Study on Structure of [tudukeru/ageru/tukeru]  
Auxiliary Verb Sentences of Japanese**

This paper is about [i-] type auxiliary verb sentence structures of Japanese, especially, focused on auxiliary verbs such as [tudukeru / ageru / tukeru].

The results are proved by Honorific-phenomenon and [dake-nai] scope-phenomenon. The results of the analysis are as follows.

- I. In case of the [tudukeru] auxiliary verbs, the [i-] type sentence has bi-clausal and mono-clausal structures in the surface level.
- II. In case of the [ageru / tukeru] auxiliary verbs, the [i-] type sentences have only mono-clausal structure in the surface level.

In this paper it is significant that there are no [i-]type auxiliary verb sentences which have only bi-clausal structure in the surface level. This means that there are no [i-]type auxiliary verb sentences which have bi-clausal structure through derive process.

